（別紙２）

論文審査の結果の要旨

氏　名　　藤本（ふじもと）　宗利（むねとし）

本論文は、『源氏物語』に比して、近年やや停滞していた観のある『枕草子』研究に新生面を切り拓いた画期的な論考である。全体は「Ⅰ類聚・随想的章段の本質」「Ⅱ『枕草子』の文章表現」「Ⅲ日記的章段の方法」「Ⅳ他作品との交差」「Ⅴ様々な視座から」の５部２５章からなる。

近年『枕草子』研究が停滞していた最大の理由は、『源氏物語』を最高峰とする平安時代文学史の中で、『枕草子』独自の文学的達成を客観的に評価し定位する視座や方法が確立されてこなかったところにある。たとえば、『枕草子』にみずみずしい感覚の冴えが見られることは従来も指摘されるところだが、その指摘も印象批評的な水準に留まるものでしかなかった。それに対して、本論文の「Ⅰ類聚・随想的章段の本質」「Ⅱ『枕草子』の文章表現」では、『枕草子』が、和歌的な美意識の規範をしたたかに踏まえた上で、それを意図的にずらし、非和歌的な即物性や漢詩のもつ写実性をも取り込んで、果敢な美意識の革新を遂行している様相を、緻密な分析を通じて明らかにしている。その際、読者の予想を裏切る表現をあえて試みることで、読者の知に揺さぶりをかける仕組みが、本書の随所に用意されていることを指摘する。『枕草子』を、通念的・規範的な「美」に対する「もどき」の文学として位置づけたところに、本論文の視点の新しさがある。また「Ⅲ日記的章段の方法」では、これまで主家の没落にほとんど言及することがないとされてきた日記的章段について新見を提示する。すなわち、あくまでも明るく描かれた記事の背後に、当時の読者なら当然中宮定子の属する中関白家を襲った悲劇を透視し、それを重ね合せて読まざるをえないような表現が張りめぐらされていること、そうした悲劇の中で定子の高貴さがいよいよ際立って印象づけられる仕掛けになっていることを明らかにする。『栄華物語』には、定子の父道隆の没後、兄伊周の失脚を経て、道長が政権を完全に掌握したあとも、定子サロンの風雅を慕って訪れる公達が絶えなかったことが記されるが、本論文は、その定子サロンの風雅のありかた、さらにはその風雅の演出に深く関わった清少納言の役割を具体的かつ鮮やかに浮かび上がらせている。従来、ややもすると、中宮定子や宮廷貴紳への無批判な讃美、漢詩文を踏まえた当意即妙の機知への自讃に終始すると見なされがちであった『枕草子』だが、そうした固定的な評価を打破した功績はきわめて大きい。さらに「Ⅳ他作品との交差」では、『枕草子』の表現の達成を、『伊勢物語』『源氏物語』などと対照しながら、平安朝文学の表現史に定位することを試みている。また「Ⅴ様々な視座から」では、上記諸論の研究成果を、さまざまな角度から敷衍しつつ、高校の古典教育に生かす実践的な試みを行っている。

本論文で藤本氏が明らかにした『枕草子』の表現の達成は、先行する曾禰好忠の和歌との関わりや『後拾遺和歌集』以後の和歌史への展望を射程に入れることで、よりダイナミックな表現史の構築に結びつく可能性をもっている。それらを視野に収めなかった点は惜しまれるが、本論文によって、『枕草子』研究の確かな礎が築かれたことはきわめて高く評価される。よって審査委員会は本論文が博士（文学）の学位に値するとの結論に達した。